

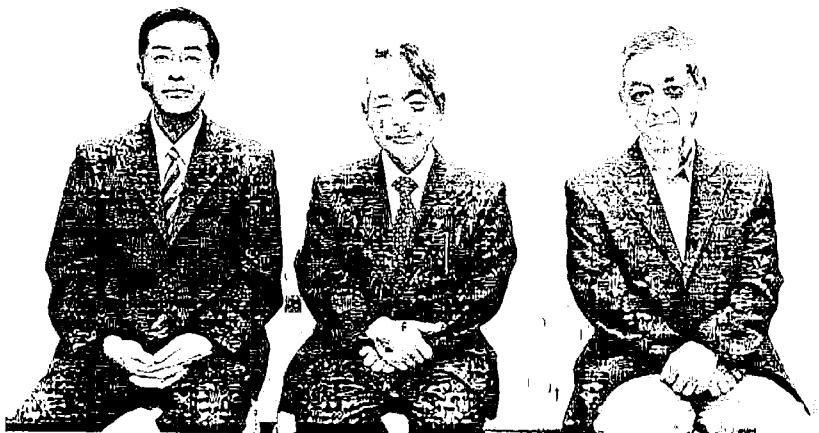
対談

# 草の根から 見るアジア

〈司会〉島蘭 進 しまの すまむ

中村 哲 なかむら てつ

金子 昭 かねこ あきら



島菌 最近、「変革期のアジア」、「激動するアジア」ということがよく言われます。そこでは宗教がかなり大きな位置を占めていると思います。例えば、ミャンマーやチベットなどで困難な状況の中、宗教者が重要な役割を果たしています。また最近は大変アジアが増えておりますが、災害が起こったときに宗教者・宗教団体などの活躍が目立ちます。あるいは少し前ですと、紛争とか文明の衝突というような話もありました。インドやパキスタンやスリランカやインドネシア、またはフィリピンなどでテロの問題などが大きな話題になっています。そのような激動のアジアの中で草の根の地域貢献をしてこられた中村先生と、また自ら宗教者であり、台湾の最も大きなボランティア団体、奇跡的な発展を遂げたといわれている慈済会の活動を研究しておられます金子先生、お二人のお話を伺いながら、今後のアジアの可能性というようなことを論じ合っていきたいと思います。

### ■ 救済と救援のズレの修正

島菌 金子先生のやってこられたことはまだ日本でもあ

まり知られていないと思います。まず最初に金子さんから、慈済会のことを中心にアジアにおける宗教団体の社会活動についてお話しただきたいと思います。

金子 最近では宗教の社会貢献ということがいろいろ聞かれますけど、これは非常に微妙な表現で、主語をどこに置かなくて随分違ってくると思うんです。つまり宗教の側が考える社会貢献と、一般社会の人たちが考える社会貢献というものが一致していかないのですが、ずれているケースが今まで多かったのですね。一般社会が求めている救援というものと、宗教が提供したい救済というものが、どうも合っていない。宗教の側は、自分たちの信仰や教えを通じて社会に役立つとうとします。布教伝道することで社会貢献をする。あるいは身も蓋も無い言い方をしてしまうと、布教伝道そのものが社会貢献である。かつてはそうした発想でいたのですが、最近、一般社会の側からの諸々のニーズに応えようという動きが顕著に出てきました。宗教団体が持っているマンパワーを災害救援のときに役立てるとか、あるいは宗教団体が経営している社会福祉施設のような社会事業を通じた貢

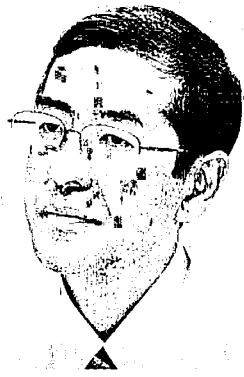
献というものです。そこでは布教伝道は直接的には問題にはなりません。

私は二〇〇二年に『駆けつける信仰者たち——天理教災害救援の百年』（天理教道友社）という本を出しました。天理教内部の人たちは、自分たちが災害救援活動を昔からひのきしん活動としてやってきたことは知っていても、どの程度深く関わってきたか、どの程度の規模でやってきたかをあまり知らない人が多いのです。例えば阪神大震災の時ですが、全国からボランティアが延べ人数で一三〇万人集まったといわれております。天理教には災害救援の専門的訓練を受けたグループ（天理教災害救援ひのきしん隊）があり、彼らがこの大震災時に延べ一万三〇四一人出動したということが記録に残っています。そうすると災害救援の場にいた一〇〇人に一人が天理教のグループだったということがわかるんです。そのようなことから、私自身も宗教と社会との関わり、特に一般の社会の人々が期待している宗教への期待と役割ということに関心を持つようになって、その延長線上に慈済会の調査研究があったわけです。

慈済会は、宗教団体であると同時にNGOという性格を持っています。日本ではどの教団が一番近いかと考えてみたのですが、キリスト教の救世軍によく似ているんですね。救世軍は信仰活動と福祉活動を両立させてやっています。あのイメージで考えていただくと分かりやすいのではないかと思います。

慈済会には「仏教慈済慈善事業基金会」という財団法人格を持っています。仏教団体の顔に加えて慈善事業のNGO団体の顔という、二つの顔を持っています。規模としては、世界最大の仏教NGO団体です。世界最大ですから、ありとあらゆる種類の活動をしていて、私は「NGOの総合商社」と呼んでいます。

実は、慈済会と中村先生との接点がひとつあるんです。それはアジアのノーベル賞とも言われるマグサイサイ賞です。中村先生は二〇〇三年の平和国際理解部門で受賞されました。マグサイサイ賞には六部門があって、慈済会代表の證嚴法師という尼僧（今年二〇〇八年）七十一歳になる）がコミュニティー指導者部門でマグサイサイ賞を受賞したのは一九九一年でした。当時は慈済会がアジ



金子 昭氏

アを中心に救援活動に乗り出してきた頃で、各国にボランティアが次々と出来ていて、そのリーダーシップを證嚴法師という尼僧が取っており、その卓越した指導性が評価されたわけです。

慈濟会は非常に面白い団体で、仏教団体としての中心に当たる部分が、尼僧ばかりの二〇〇人前後の出家者集団なんです。そして、それを取り囲むようにして在家の人たちの会員がいます。その数たるや、四〇〇万とも五〇〇万とも言われています。彼ら在家の人たちにとって

は、ボランティア活動をするということが、自分たちの修行という位置づけなんです。出家は出家としての役割を果たしているんですけども、在家信者はそういったボランティアをしている。救世軍は軍隊になぞらえた組織にして効率よくやっていますが、軍隊的な名称こそ使わないものの、やはり慈濟会もまた、委員と呼ばれる幹部会員を中心に、とても効率がいい組織になっています。

#### ■ 支援活動は誰のためにあるのか

島園 中村先生の場合、最初はハンセン病患者の救済をキリスト教関係のNGOとして始められたこともあったと思いますが、特に宗教とは関わりなくアフガニスタンでの様々な救援活動をしてこられました。しかし私のような宗教研究者から見ると、中村先生の活動には、ある意味非常に宗教的と言いますか、人間の在り方の深い意味を求めている、というような次元がある気がしております。先生のほうから少し、二〇数年間のことになるかと思いますが、その経緯を少しかいつまんでお話いただいで、話のきっかけを作っていただけだと思います。

大きな流れとして、先生が取り組んできた活動の展開がいかにして現地人のニーズに合い、現地人の立場からの救援活動に徹してきたかということ。それが、今、アジアから宗教を考えるとということに関わっているような気がしています。そのあたりのことを少しお話いただければと思います。

中村 二四年前ですか、ハンセン病コントロール計画というのがあり、五カ年計画という形でしたが、参加することになりました。その場所は行政上はパキスタンですが、事実上アフガニスタンの一部でしたから、それがきっかけになりました。当時アフガン戦争もありましたしね。その後、医療関係の立場からアフガンの問題に巻き込まれていったといえるでしょうね。

ハンセン病コントロールといっても、医者も何もいないところでその病気だけ取り扱うというのはできません。大抵の患者はアフガニスタンの山の中の貧しい村からやってきます。そういうところでは医療設備もほとんどありません。他の病気も多い。それでハンセン病だけを診るわけにもいかないということで、アフガニスタン国内

に一般診療施設を開きました。アフガニスタン国内と言いますが、都市部を除くとほぼ全部が無医地区と言っています。その中でも山岳部の貧しいところに開きました。ハンセン病だ、ハンセン病だ、と言っていること自体が偏見のもとになってくるので、特別扱いせずに一般の診療をしながら診ようということになったんです。そのようにやってきたわけですが、二〇〇〇年の夏に干ばつに遭遇しました。このときの犠牲者は、飲み水と食べ物があったなら死ななかつただろうというのが九割以上だったんです。

つまり砂漠化の問題です。実際にどんどん村が消えていっている。今でも続いているんです。あまり知られていないと思うけれど、村が消えていっている。アフガン人のほとんどは農民ですが、農民が生きていく空間が、今半分以上消えている。この砂漠化の問題が国際社会に知られないまま、みんなの生活がどんどん苦しくなっているのです。

しかし、なぜか国際社会はそのことに触れたがらない。どうしても政治問題にすり替えて、アフガニスタンに良



中村 哲氏

い政権ができれば、魔法のようにみんなの生活が良くなるだろうというまじないをみんな信じている。しかしまじないで良くなるわけではないので、事情はどんどん悪くなつていく。ともかく、そういう状況で、今すぐ何が必要かということをおぼろげに把握しながらやってきたことが、長続きと、みんなの支持を得ることにつながったのではないかと思います。それは国際社会が評価する、しない、というところとは全く別の次元だと思ふんですよ。みんなは何を欲しているのかということの考察が、国際社会

にはほとんど無かったということです。

島園 世界から様々なボランティア団体やNGOがアフガン救済のために、ということに入っていったと思いますが、そういう団体の活動がなかなか功を奏していなかったということでしょうか？

中村 ここ二〇数年でNGOなどの国際団体の性質がどんどん変わっていったと思います。当初は医療関係でも何をまともと言うかは別として、真面目に診療すると言う意味ではそれなりの団体がありました。彼らもアフガン人と共に行動し、アフガン人の間で信頼を得ていたわけです。しかし、それらがだんだん変質していきまして、口先だけの援助になっていったわけです。口先だけというのは、オフィスでの管理の仕事が中心になっていったということです。つまり、実践部隊がなくなつていった。簡単に言うると流れていくお金の整理なんです。それで墮落しちゃったんですね。

まあ、墮落という言葉は良くないのかもしれませんが、けれど、私から言わせれば変質しちゃったんです。そうなると、どうしてもドナーのほうに、寄付者のほうに顔が

向きますから、現地が欲していることよりもドナーをいかに喜ばせるかということに重点を置く。ドナーを喜ばせないことには次の年の予算が下りませんから。いい顔をする対象が現地よりも本国になった。これでは本末転倒であるということです。

先ほど金子先生がおっしゃったように、キリスト教団体では宣教が中心になります。色んな施しの活動はするけれども、究極の目標はいかにキリスト教徒を増やすかということでしょう。こんなやり方、私は嫌いですね。



島園 進氏

島園 慈済会もそのあたりのことに一種の問題意識を持っていきますね。

金子 お二人のやりとりから現地中心主義ということが出てきましたが、これが実は慈済会の出発点でもありました。慈済会は一九六六年の成立なので、たかだか四〇年位の歴史しかないのです。台湾は戦後、長期にわたる戒厳令体制がしかれていて、一時はそれこそ北朝鮮みたいな状況でもあったんです。蒋介石による「大陸反攻」政策のために、軍事に力を入れて福祉が後回しになった。ですから、金持ちの人はもちろんいたわけですが、貧しい人もいっぱいいた。でも、貧しい人たちを助けるべき国家は何もしてくれない。じゃあ、もう自分たちでするしかない。このようなことが出発点であったわけです。中村先生もハンセン病から出発されましたけれども、問題はハンセン病だけではなかったのと似ています。貧困問題の周辺には、医者にかかるうえにもお金がない、医者にかかれないと病気が悪化して、ますます貧困になってゆくという、負のスパイラルができてしまっている。医療保険制度が当時はなかったわけですから。